

第1組法運寺住職 堀 晃運

私事ではありますが、1年半ほど前に父が亡くなりました。行年95歳でした。亡くなる3週間ほど前から日増しに食べる量が減り、トイレにも自力で行けなくなりました。入院を薦めましたが、「入院はしたくない」と断りました。父は、それまでは何度か入院したこともありましたが、今度ばかりは入院し治療を受けようという気持ちが全くないと分かりました。間もなく会話も出来なくなり、それからは毎晩家族が交替で添い寝をしました。そして、1週間後の未明に息を引き取りました。

入院をしないと行ったのは、自宅の畳の上で家族に見守られながら、治療を加えられることなく、出来るだけ自然のままに命を終えたいと思ったのだろうと私なりに解釈しています。

1周忌の準備をしているとき、父の死に際について思い返してみると、「治療を受けない」と言ったのは、もう自力での回復は望めないと感じたからだと思っています。それまでは、「まだ大丈夫だ、余力がある」との思いがあったのですが、とうとう力尽きたと感じたのだと思います。

歎異抄に、凡夫の常として『なごりおしくおもえども、娑婆の縁つきて ちからなくして おはるときに かの土へはまひるべきなり』とありますが、父はこの言葉のように一人の凡夫として静かに生涯を終えていきました。

父への欲目かもしれませんが、このとき初めて父は自力のはからいを捨てることが出来たのではないかと思います。阿弥陀さんの声が聞こえてきたのではないかと思います。

「自力を使うことが無効だということは、命の瀬戸際にならないと分かんものだよ」という父の厳しい言葉を聞いた1周忌の法要でした。